

# 元版『四家錄』とその資料

椎名宏雄

## 一 『四家評唱錄』と『四家錄』

宋代の禅宗各派は、競つて自派の源流をなす祖師四名の語録を集め、これを「四家錄」と称して重用した。同一の分野において四人の大家をたてる、中国古来の伝統をふまえたものである。かくて、臨済系統では、北宋末の『馬祖四家錄』(一〇八五序)、南宋期の『黃龍四家錄』(一一四一序)、『慈明四家錄』(一一五三序)等が編せられ、青原系統にも『徳山四家錄』(逸書)<sup>(1)</sup>が存した。前三書は、黄龍派や楊岐派の発展を契機とする集録といわれ、また、徳山下のそれは、雲門宗の隆盛の影に置かれた傍系者による編集であった。いずれも、自派を顕彰するための意図的な編成という点では、機を一にするものである。

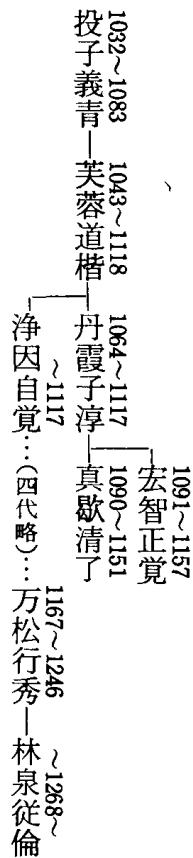
一方、曹洞宗では、時代は遅れるが、四家の頌古に評唱等を付した「評唱錄」の叢書が作られている。正蔵や正統蔵に

収める流布本系の『從容錄』には、明末の万曆三五年(一六〇七)に撰した羅汝芳の「重刻四家語錄序」と華亭の「重刻四家評唱序」が付され、それが前代の成立なることを示している。ただ、これらの序文からは、「評唱錄」個々の書名は不詳であるが、本邦で承応三年(一六五四)刊行の『從容錄』『空谷集』『虛堂集』三書の各巻末には、長崎皓台寺一庭融頓による次の刻記がみえる。

「四家錄」は、円悟の『碧巖集』、万松の『逍遙庵錄』、林泉の『空谷集』、同じく『虛堂集』なり。然し、『碧巖集』は世に行なわれて年尚し。故に、三家錄の大明印本を以て書林に捨入し、之を新刊して後昆学道の人の為にす、と云う。(原漢文)

この刻記は、明代における『四家評唱錄』の構成を明瞭に示し、とりわけ『碧巖集』を含むことをのべる点で重要である。いうまでもなく、『空谷集』と『虛堂集』は、投子義青と丹霞子淳の各「頌古百則」を林泉從倫が評唱等を加えたも

の、『從容錄』は、宏智正覺の「頌古百則」を林泉の師、万松行秀が評唱した書である。これらの撰者たちは、左の法系関係にある。



したがって、右の三書と、同じく万松が宏智の「拈古百則」を評唱した『請益錄』とを合した四書が、曹洞宗の“四家評唱錄”と考えたいのであるが、実際は異なる。意外にも

『碧巖集』を含むことは、禅門第一の書とされるこの書が、おそらくは洞門でも特別にみられていたことを示す証左であろう。ともあれ、日本曹洞宗では、近世以降は『從容錄』が特に重視され、幾多の刊行を重ねる間に、もはや『四家評唱錄』の「」ときは忘れられている。しかし、いやしくも曹洞宗

の叢書として編成されたからには、その原型や成立と変遷など、禅宗史や禪錄研究の上から注目されるべきであり、その意義が究明されなければならない。

さて、『四家評唱錄』の母体は、いうまでもなく四家の頌古であるが、この「頌古集」が『四家評唱錄』とは別個に存在することは、明末にはすでに知られていた。すなわち、喜興藏といわれる明版大藏經を完成させた密藏道開（一一五八五）

## の『藏逸經書標目』中に

四家頌古 天童、雪竇、投子、丹霞

とみえるのがそれである。しかし、この『四家頌古』は、近年までその存在がまったく知られず、研究の対象にもなりえなかつた。ところが、最近、阿部隆一氏によつて、台湾の国立中央図書館に所蔵される元版の該書に関する書誌的紹介がなされ、斯界を裨益している。<sup>(2)</sup> あたかも、駒大図書館には、

最近本書のマイクロフィルムが台湾からとりよせられ、てそなたがつた。ところが、最近、阿部隆一氏によつて、台湾の国立中央図書館に所蔵される元版の該書に関する書誌的紹介がなされ、斯界を裨益している。<sup>(2)</sup> あたかも、駒大図書館には、最近本書のマイクロフィルムが台湾からとりよせられ、てそなたがつた。ところが、最近、阿部隆一氏によつて、台湾の

の研究が容易となつていて、

したがつて、本稿ではこの新出文献について、上述の観点から、まず資料紹介を行なつておきたいと思う。この仕事はまた、今後に期せられるべき『四家評唱錄』個々のテキストの系統に関する書誌的研究のための、基礎的な作業となるはずである。

## 二 元版『四家錄』の形態

元版『四家錄』の書誌的事項は、原本を実際に調査された阿部氏の解説に詳しいので、ここでは本文内容を中心とした紹介としたい。

本書は、上(二卷)下(二卷)四冊から成り、印刷元題簽には「四家錄上天童」「四家錄下投子」である。本文の行格は、四周双辺、序跋を除き有界一〇行、行一八字である。版心は

「天童（丁数）」、象鼻上部に刻字数、下部に刻工名がみえる。印刷は磨滅の箇所があり、明代の補刻箇所は、天童頌古（五・六・二五・二六の各丁）、雪竇頌古（二五丁）、投子頌古（一七・一八丁）、丹霞頌古（五・六・一七・二二の各丁、及び一九丁下、二〇丁下、三三丁上、二四丁下、の各部分）である。

全体の巻次編成と内容構成は、次の順序となつてている。

上〔第一冊〕

- ①天童宏智覚和尚頌古集序 建炎三（一二二九）、嗣宗撰、南山書（二丁）

- ②天童覺和尚頌古 法潤・信悟編（二五・五丁）

- ③刊語 至正二（一二三四二）、大明寺海島刊（半丁）

- ④助縁者名（七名列記）（半丁）

〔第二冊〕

- ①雪竇明覺和尚頌古集序 曇玉撰

- ②刊記 至正二（一二三四二）

- ③雪竇顥和尚頌古 遠塵集（二五丁、尾欠）

- ④新刊四家錄後序 至正二（一二三四二）、雲山慧從撰（二丁）

下〔第一冊〕

- ①投子山青和尚頌古集序 元豐七（一〇八四）、李仲元撰（一丁）

- ②投子青禪師頌古 徒円編（二五・五丁、尾欠）

〔第二冊〕

- ①円霞山淳禪師頌古集序 王來撰、南山書（二丁）

- ②丹霞淳禪師頌古 慶環編（二七・五丁、尾欠）

元版『四家錄』とその資料（椎名）

③丹霞山淳禪師頌古序 正覺述（二丁）

右における四冊の順序は、前記『藏逸經書標目』所載のものに等しく、正しい順序であることが知られる。ただ、惜しむらくは、「雪竇頌古」は第八一則の首部「……与汝喫底人遂具眼」まで、以下の本文を欠く。また、「投子頌古」は、

第一〇〇則の第一行目「……山云平地起」までの尾欠本、「丹霞頌古」も第一〇〇則の末尾の頌二句を欠いている。

さて、本書は「天童頌古」の巻末に、次の刊記と助縁者名をとどめる。

至正二年歲次壬午蕤賓一日 大明禪寺住持海島刊板印施流通

香山侍者 円明 書

告白慕道高流此板見在西香山用者請來印造

大道者山雲峯禪寺住持嗣祖 沙門月巖 德明 助縁

大香山永安禪寺住持嗣祖 沙門惠川 福珪 助縁

大甘泉普濟空寺住持嗣祖 沙門東溟 海潮 劍縁

大万寿禪寺住持嗣祖 沙門玉川 道僖 助縁

大承天護聖寺住持

舍人 月潭大師 了資 助縁

大師國王孫銀青榮祿大夫河南江北等處行中書省國王丞相

朵兒只 特穆哥室利 施財

また一方、「雪竇頌古」の巻末には、この『四家錄』刊行の経緯を記す慧從の「後序」が付せられている。以下、その意訳と原文とを示そう。

## 新刊の四家錄の後序

す。どうか先生、わたくしのこの願いをかなえて下さい。』と。

私は玉川師の志に打たれて、すぐにこれに応えていた。

玉川の海島師は、禅法を、今は東山を隠居した東溟長老から受け出世し、大きな寺々に住持した。その至るところ、学道者が群がり集まつて、寺門の清規は整厳に行なわれた。特に、瑞州の香岩道場に住持するや、大いに法施を開演して宗風を振いおこしたので、山東の修学者たちは、はじめてその果報をうけた。そのうち、間もなく海島師は、法弟の中峯を堂頭に允當て寺のことを頒べきせ、わたくしこと雲山の田舎僧のもとに来て、次のようにのべた。

「わたくしは、不肖ながら、はずかしくも香岩寺に住して、何年かがたちました。二三子と奥深い山にこもり、懽しくおたずねすることもしませんでした。願わくは、この書を提携げて仏恩に報いたいのですが、見解が荒疎ず、これを発明できないのを、みずから愧じいるのみです。叢林の『四家錄』は、そのまま禅門の關鍵であり、学道者への指南です。ところが、その板本は歳久しきく、伝写本も誤まられて、鳥や焉の字を馬とするような誼をまぬがれません。これに加えて、……（不明）……下り、宗風は凋契えています。ましてや、あの偏な一偶で、ああした教導を久しくするに至つてはなおさらです。白髮黃齒ても、その面目をしらぬ者があるのは、たいへん愍傷むべきことです。今は、重ねて刊板を新たにし、広く流通させたいのです。庶むらくは、後學者に与えてその逕路を廓げ、直ちに閩域に趣かせたいのです。また、別に祈ることは、本書が大手の筆で裝写され、また後序をつけていただき、仏祖の大意を発明して、永久の願いを寿ぶことあります

「わが宗には、まとまつた語句がないので、前から学道の者に与えるものはありません。今は諸方の老宿の語録が編集されていて、どうして四家だけにとどまることがありますよう。初め、妙喜老師は、学道者が文字の学問に溺れるのを恐れて、ついにその板木を斧し、その書物を焼きましたが、結局、禅者はまたそれぞれの語句を作りました。他時に、もしも上根利智の者に遇つて、私の刊行があたかも坑空を画き、夢中の夢を説くようなものと責められたときには、私とあなたは、一時の敗闘をまぬがれないでしょう。しかし、それでも、人は記録すべきところがないから記録し、私は叙べるべきところがないから叙べる。いわゆる一切の法を空しくせず、世間の相を……しないで、一体何の傷を消せましょうか」と。

ただ、老眼はもうかすんで、師の来意にかなうことことができないので、直ちにそのことを書き、その年月を紀しておく。

時に至正壬午（一二四二）の五月

雲山の田舎僧、慧從が書く 印 印

新刊四家錄後序

玉川島公、得法於東山退堂東溟老出世、累遷大刹。所至学者雲集、清規整嚴。及住瑞州之香岩道場、大開法施、振起宗風、東方学徒始知趣向。未幾、以法弟中峯允堂頭、領其寺事、來謁雲山野人曰、余以不肖、忝主香岩、有年矣。与二三子、固守窮山、懵無所詣時。願提携之、以報仏恩、自愧見解荒疎、不能發明之耳。而叢林所謂

四家錄者、乃禪門之閑鍵、學者之指南。其奈板本歲久、伝写失真、未免有烏焉成馬之謬。加以、□□下□、宗風凋契。况彼偏處一隅、久夫教導、雖髮白齒黃、有不識其面者、甚可愍傷。今欲重新刊板、以広流通。庶与後学、廓其逕路、直趣闇域。敢祈大手筆裝写、復為後序、發明仏祖大意、以寿永久願。師為我成之。余壯玉川之志、即應之曰、我宗無語句、本無一法与人。今諸方老宿、語錄成帙、豈止四家而已。初妙喜老翁、恐人溺於文字之學、遂至斧其板、火其書。子復區區作此、他時若遇上根利智、責我以刻劃虛空、說夢中夢、則我与汝未免一場敗闕也歟。雖然、彼以無所錄而錄、我以無所叙而叙。所謂、不空一切法、不□世間相、膺何傷乎。但恨老眼昏花、不能副其來意故、直書其事、以紀其歲月、云。

告至正壬午薦賓節日

雲山野僧 慧從書 印 印

本書は元来、四卷四冊のセットとして再版されたのであるが、各冊が独自の頌古集であるために、単独でも伝えられたようで、同じ台湾の中央図書館には、「天童頌古」と「雪竇頌古」とが各別冊で所蔵されている。<sup>(4)</sup>また、『北京図書館善頌古』とが各別冊で所蔵されている。<sup>(4)</sup>また、『北京図書館善頌古』とが各別冊で所蔵されている。また、『北京図書館善頌古』とが各別冊で所蔵されている。

本書目』卷五の釈家類には、  
雪竇顯和尚頌古 一卷宋釈遠塵輯 明三河大明  
禪師釈海島刻本 一冊

とあり、これまた『四家錄』中の一冊にほかならない。

ところで、至正版のもとづく初刊本や、『四家錄』そのものの成立については、前掲の「後序」はふれていない。初刊本は、すでに独立していた四つの「頌古百則」を集めたにすぎないのであろうか。であるならば、それはどこから採録したのか。こうした問題を追求するために、「各頌古集」における資料的な特徴を次にみよう。

### 三 『四家錄』の資料的特徴

文は潭々として人の胸を打つものがある。ともあれ、右の刊記と後序によつて、この『四家錄』は元の至正二年（一三四二）に、玉川大明寺の海島の発願により、丞相朵兒只<sup>トールチ</sup>をはじめ、著名な僧俗の施財をえて、西香山大明寺から再版された一本なることが知られる。目下のところ、海島以下の助縁僧の名は、僧伝等の中にもいだし難い。しかし、寺名はおおむね、直隸・江蘇地方の所在とみられるから、本書の性格と、慧從の「我宗無語句」などの言から推して、多分、元代に河北・江蘇・河南等の中国北地に隠然たる勢力を有していく万松行秀系統の曹洞宗に屬する人々によつて、本書は上梓<sup>(3)</sup>した。

されたものと思われる。

本書は元来、四卷四冊のセットとして再版されたのであるが、各冊が独自の頌古集であるために、単独でも伝えられたようで、同じ台湾の中央図書館には、「天童頌古」と「雪竇頌古」とが各別冊で所蔵されている。<sup>(4)</sup>また、『北京図書館善頌古』とが各別冊で所蔵されている。<sup>(4)</sup>また、『北京図書館善頌古』とが各別冊で所蔵されている。

まず、第一冊の「天童頌古」は、巻頭に建炎三年（一一二九）嗣宗の撰する「天童宏智覺和尚頌古集序」が置かれる。ところが、この序文は、宋版の『宏智錄』をはじめ、流布本の『宏智廣錄』等に収められる「頌古」「拈古」の巻頭にある「長蘆覺和尚頌古拈古集序」と同文である。異なるところは、この内題と、文中の“長蘆和尚”を“天童和尚”とする

ほか、二、三の文字の異同のみである。

したがつて、おそらくこの序文は、『四家錄』を編集した際に、元来「頌古拈古集」としてあつた一本から採り、表題等を改めたものであろう。文中、宏智の頌古と拈古とを賞讃する「古徳機縁二百則、云々」の語句が改められていないのは、むしろ良心的とみてよい。してみると、序文のみならず本文も、「頌古拈古集」から採録したとみられよう。なお、石井修道氏による宋版『宏智錄』の詳細な検討により、頌古は宏智の初住地である泗州大聖普照寺時代（一一二四～六）の作であり、卷二に収録される「頌古」の末尾には、慶元三年（一一九七）の刊記を有することなどが、すでに解説されてい。(5)

また、本文の内容は、流布本の百則と同順序ではあるが、文字には若干の異同があり、頌の前に「頌曰」の文字がないなどの相違がみられる。したがつて、本書は、資料的には『宏智錄』や『從容錄』の古版との間に、貴重な対校資料を提供するものである。

第二冊目の「雪竇頌古」は、前述のごとく第八一則の首部以下を欠くが、現存箇所の順序は『碧巖集』のそれとは異なり、道元の「一夜本」や、宋版（四部叢刊本）や五山版の「雪竇頌古」と一致する。いうまでもなく、古型を保持するもので、本書の成立や変遷に関する解説が重視されている現在、(6)

そのテキスト研究にとって、本書もまた重要な古資料となりうるものである。

第四冊の「投子頌古」は、従来、本邦享保一〇年（一七二五）刊行の『舒州投子青禪師語錄』（正統藏一一二九所収）と、林泉の評唱した『空谷集』によって知られるのみであるから、本書の存在は貴重である。しかも、本文の卷頭には「侍者従円編」とあり、本頌古の編者名がはじめて明らかになつたが、その伝記は不詳である。

ところで、本書の卷頭には元豐七年（一〇八四）撰の李仲元による「投子山青和尚頌古集序」が置かれるが、なんとこれは、前記享保版『語錄』の序文、「舒州投子山青禪師語錄序」とほぼ同文なのである。本文中にも文字の異同が少しあるので、これを『語錄』本で対校して次に掲げておく。

#### 投子山青和尚頌古集序

\*和尚頌古集

昔、大陽山中、木人孤坐、石女懷胎、頻年不舉。山——禪師語錄  
前瑞草、付与誰耘、嶺畔泥牛、何人收放。空王殿上、\*草——艸  
縫布衫、當時覲面呈人、到底承当不下。月華円鑑、  
車軸將摧、古仏渡頭、船舷欲破。唯有半穿皮履、無  
攢眉浩歎、携歸金谷巖中、分付白雲老子。於是、金 \*攢眉浩歎—  
雞抱卵、丹鳳生雛、玉樹開花、蟠桃結子。直得山河  
震動、大地掀騰、不妨特地新鮮、也是一場奇怪。從 \*震—振  
此、壳油市上、旧店重開、古廟香爐、祥烟再起。胡

\*笳曲子、韻出青霄、写向無孔笛中、未知誰人側耳。

諸方伝玄<sup>\*</sup>、各善護持、若遇知音、大家吹唱。

元豊七年四月望日

龍眠李沖元序

\*笳一家  
\*玄一去  
\*元一時元

右の序文の内容から察するに、もともと『語録』の序として有したものと、『四家録』の編者が「天童頌古」の場合と同じく、これを採つて「投子頌古」の序としたものであろう。つまり、「投子頌古」には元来独自の序は存在しなかつたのであって、おそらくは、流布本『語録』が依つたとみられる宋版『投子語録』<sup>(7)</sup>から、編者は「頌古」と序とを採録したと見るべきであるう。

ところで、『語録』本の「頌古」は、『空谷集』のものと本文字句の相違が大きいため、『語録』では巻末の「校讎」にその校注を載せている。続蔵本もまたこれを踏襲している。しかし、『四家録』本は『空谷集』のものに近い。しかし、全同ではない。したがつて、本書は今後、資料的にはきわめて重視されなければならない。

第四冊の「丹霞頌古」も、従来は本邦宝永七年（一七一〇）刊行の『増輯丹霞淳禪師語録』と、林泉が評唱した『虚堂集』によつて知られるのみであった。もつとも、駒大には近世の写本一冊が所蔵されるが、これは内容的に『虚堂集』からの抜書とみられるものである。

『増輯語録』本と『虚堂集』本との「投子頌古」の比較検討は、これも石井氏によつてなされており<sup>(8)</sup>、その順序・語句ともに不一致なこと、『増輯語録』のものは、『禪宗頌古聯珠通集』から抜粋した「頌古」を『虚堂集』によつて補訂したもの、という指摘がなされている。しかるにいま、『四家録』本は『虚堂集』本にほぼ近く、順序も一致する。のみならず、従来未知の二序を有するなど、資料的には『四家録』中もつとも貴重と思われる所以で、本書の全文を前記二書と対校して、資料として小稿の末尾に掲げておいた。

さて、本書もまた本文首部に「参考比丘僧慶環編」とあつて、はじめて「丹霞頌古」の編者名が判明する。『慶環』は不詳であるが、丹霞の法嗣に大洪山慶預（一〇七八—一一四〇）があり、また、丹霞の法從兄に当る大洪山守遂（一〇七二—一四七）の「塔銘」<sup>(9)</sup>中には、守遂の臨終の際に「小師環」の名がみえる。いったい、「丹霞頌古」の第九九・一〇〇則の最後は、大洪山開祖報恩の則であるから、編者「慶環」は右の慶預か「小師環」のいずれかと同人であろう。

本書には、本文をはさんで王案<sup>しん</sup>と宏智による二つの序が存する。ともに他にみられぬ新出資料である。年記は存しないが、王案の序には「南山書」とあり、あたかも建炎三年（一二九）に撰した前掲「天童頌古」の序文の筆写子と等しく、またしかに同手である。ゆえに、二序を付した「丹霞頌古」

一巻が、建炎三年ごろに刊行されたことも予想されよう。これら二序の原文は△資料▽として載せたので、ここでは以下、続いて訓読をしておこう。

### 丹霞山淳禪師頌古集の序

朝奉大夫、前権發遣、陝州軍府事の王案、  
神岡の已禪師が為に譲す。

青原の宗派の下、十二代の著わせる機縁にして、丹霞の杖払の前に、七十人の見成せる公案なり。従頭より拈掇し、脱体に提撕す。既に枯木の吟に諧い、遂に胡笳の曲に入る。木人は處に唱い、石女は時に和す。蓋し、七月、幽を陳べて周業を光らすこと有るに同じく、何ぞ、六卿の晉を賦するに、鄭風を出でざるに異ならん。後世の児孫をして、自家の父祖を認得せんと欲ば、更に言語道断なることを須いて、すなわち文字の性空なるにしたがうべし。切に忌む、葛藤して妄りに荆棘を生ぜんことを。

東岡の老弟、其の伝を広むるを請む。南陝の小儒、謹しんで之が為に序す。

南山、書す。

### 丹霞山淳禪師頌古の序

参考の比丘僧、正覚述ぶ。

嶺南の後派は岐を列し、曹洞の一宗を分ち、門庭孤峻の月は雲を鉤るも、餌は清波を犯さず。意は自ずから玉線金針を殊にし、虛玄の鋒を宛転して露わざす。正偏兼到の妙は<sup>(10)</sup>ことと功を忘じ、明晦叶通の力は窮まりて位を転ず。綿綿として其の胄に克当する者は、爰<sup>すなわち</sup>丹霞淳禪師有る歟。師、一日退居して庵に住することな

し。宗風の墮んと欲るを慨き、乃ち従上の機縁を採摭す。首は清源より、下は之れ保寿まで、總て一百則、集めて頌を為し、道に至らしめ、後昆に垂裕す。其の宗を明らかに、潛かに未兆の前に通じ、其の旨を立つるや、密に無功の後に契う。烟籠の古路は玉馬に乗り、以て苔を践み、月を紋し滄を鎮め、溟に泥牛に駕りて耕す。全体を練色せば、即ち用、豈に滞らんや、全事を虚凝せば、即ち真、彰れざらん。影は琉璃の殿上に迹い、臣は位を退きて朝君に御し、翡翠簾前の子は、身を転じて父に就く。功を借り位を明らめ、撒手して途を廻す。幽岩の枯木は芳を騰し、古澗の寒氷は鮮を発す。密雲は雨を致き、万物を済すも以て無心、杲日は天に麗わしく、百川に落して照にあらず。無絃の曲調は宮商に属せず、自ずから知音有らば、遁相に證拠とせん。謹しんで序す。

みると、王案の序文は、神岡已禪師の請めによつて撰したものである。王案は不詳であるが、神岡已是文中の「東岡の老弟」とみられるから、おそらくは、丹霞の同門である白水修己（梅山已）その人であろう。一方、宏智の序は『広録』等にも存しないが、周葵が宏智の示寂の翌年（一一五八）に撰した「宏智禪師妙光塔銘」中に、宏智が丹霞山子淳のもとで開悟得法した後、「淳、頌古を作し、師（=宏智）をして其の首に叙べしむ。芙蓉楷禪師、之を見て曰く、僧中の復此に有りや、吾が宗隊せず」とあるものに相違ない。

文中、「丹霞頌古」は、丹霞が退院の際の作なることをのべるが、これは、丹霞山で化導の後、政和三十一年ごろに唐

州大乗山の西庵に退居して同五年（一一一五）に隨州大洪山に住するまでの間なることが、丹霞や宏智の「塔銘」によつて知られる。したがつて、この頌古と序文の成立を下限の政和五年とみても、時に丹霞は示寂二年前の五二歳、宏智は実に二五歳である。すなわち、宏智の序は、宏智が開堂以前の最初期の作品としては驚くべき秀作であり、祖父、芙蓉をして歓喜せしめた理由が首肯される。『四家錄』には、あたかもこの珍貴な序文が、独特的の書写体で刻字される。これが宏智の真筆を摸刻したものとすれば、端正で氣品ある筆跡は、宏智の墨跡が他に知られぬだけに貴重な遺存である。

さて、「丹霞頌古」の本文は△資料▽に示すとおりであるが、『虚堂集』系統に比して未整理の字句が多い。いうまでもなく、原型に近いテキストなることを知らしめるもので、今後は本書を重視すべきである。また、百則は形態的に独特であるため、その法系図を△附録▽として掲げておいた。

ちなみに、形態面の特徴をあげれば、（一）青原（二）薬山系統の者に限られること、（三）薬山……芙蓉がその中心をなしていること、（四）百則の配列が原則として法系順であること、（五）芙蓉の師兄である大洪報恩の則が巻末に置かれること、等が指摘される。かくして、本書は“薬山系伝燈頌古集”とでもいるべき独特の性格をもつといえよう。

以上、元版『四家錄』の各冊について、資料的な特徴を検討したが、本書は一三四二年の再版本ながら、貴重なテキストであることが判明した。ただし、これは宋代の初刻本の覆刻であることを前提とするが、それを否定する要素も特にみあたらない。したがつて、さいごに初刻本の成立時期について考えておきたい。

まず、『四家錄』は、時代的に最も成立の遅い「宏智頌古」を最初に置くことに注意したい。その序文は、もともと建炎三年（一一二九）に成った「頌古拈古集」に存したもののが改作であった。ところが、宋版『宏智錄』の「頌古拈古集」には、慶元三年（一一九七）の刊記が存し、その刊本が『宏智錄』卷二に配せられている。してみれば、『四家錄』編集の上限は建炎三年である。これが慶元三年まで下るか否かは、今後、『宏智錄』本と『四家錄』本の対校によって明瞭となろう。

では、成立の下限はいつか。これは、まず『四家錄』の成立は『四家評唱錄』の成立に先行するとみるのが常識であろう。とすれば、『評唱錄』中、最古の成立は『碧巖集』である。ただし、その初版は大徳四年（一三〇〇）と推定されている。<sup>[12]</sup>ついで、『從容錄』が嘉定一七年（一二三四）に成立する。この時に刊行された宋版は現存しないが、前記のごとき『四家錄』の性格からみて、この嘉定一七年を成立の下限とみたい。すなわち、『四家錄』の編集・開版の時期は、一一二九

年または一九七九年から一二二四年に至る間、と推定しておきたい。

究所紀要一〇等。

- (7) 『投子語録』の流布本と宋版の関係については、柳田聖山「禅籍解題」(世界古典文学全集36B)、石井修道「宋代曹洞宗禅籍考—投子義青の二種の語録—」(駒大仏教学部研究紀要三五)を参照。

△資料▼

丹霞淳禪師頌古

- 〔底本〕『四家錄』元版、至正二年（一二三四年）刊、中華民國國立中央圖書館藏（M.F. 駒大圖書館藏）  
〔校本〕1 『虛堂集』元貞元年（一二九五）序刊本、（一九七一年、台北廣文書局影印）  
2 『丹霞淳禪師頌古百則』江戸期写本、駒大図書館蔵  
：

丹霞山淳禪師頌古集序

朝奉大夫、前樞發遣、陝州軍府事、王案、為神岡已禪師譲  
青原宗派之下、十二代所著機緣、丹霞杖拂之前、七十人見成公案、從頭拈掇、脫體提撕。既諳枯木之吟、  
遂入胡笳之曲。木人唱処、石女和時。蓋同七月陳爾、有光周業、何異六卿賦晉、不出鄭風。欲令後世兒  
孫、認得自家父祖。更須言語道斷、方乃文字性空。切忌葛藤妄生荆棘。東岡老弟、請広其伝。南陝小儒

\*  
シ 虚駒二ハコノ序文ナ

南山 書

## 丹霞淳禪師頌古

参考比丘僧 慶環 編

\* (虚駒)ニハコノ編者名  
ナシ

(1) 拙、清原思禪師問六祖大師、當何所務、即得不落階級。祖伝、汝曾作什麼來。思云、聖諦亦不為。祖

云、落何階級。思云、聖諦尚不為、落何階級。祖云、如是如是、善自護持。吾當有偈、心地含諸種、

普雨悉皆萌、頓悟花情已、菩提果自成。

卓爾難將正眼窺 迦超今古類何齊

苔封古殿無人侍 月鎖蒼梧鳳不棲\*

\* 棲—栖(虚駒)

\* 清—青(虚駒)

(2) 拙、石頭遷禪師問清原云、和尚自離曹溪、甚時到此間。原云、我却不知、汝甚時離曹溪來。頭云、某

甲不從曹溪來。原云、我已知汝來處了也。頭云、和尚幸是大人、且莫造次。

木人來問青霄路 玉女年尊以不聞

携手相將歸故國 暮山岌岌鑄重雲\*

\* 鑄—鎖(虚駒)

(3) 拙、藥山儼禪師、一日在石頭上坐次、石頭和尚見乃問云、在這裏作什麼。山云、一物不為。頭云、恁

麼則閑坐也。山云、閑坐即為也。頭云、汝道不為、不為箇什麼。山云、千聖亦不識。石頭因以偈贊曰、

從來共住不知名、任運相將祗麼行、自古上賢猶不識、造次凡流豈可明。

玄微及盡本翛然 若謂渠閑萬八千

月印澄江魚不見 魚人何必更拋筌

(4) 拙、船子誠禪師、囑夾山云、直須藏身處沒蹤跡、沒蹤跡處莫藏身。吾三十年在藥山、祇明斯事。

白雲檻外思悠哉 密密金刀剪不開

幽洞豈拘閂鎖意 徒橫無繫去還來

(5) 拳、牌樹省禪師問洞山、什麼處來。山云、親近來。樹云、若是親近、用動這兩片皮作什麼。<sup>\*</sup>後、曹山聞拳乃云、一子親得。

\* \*  
什 一 甚 虛 駒

從來父子不相離  
昨夜寒巖無影木  
石女何勞更問伊  
白雲深處露橫枝

(6) 拳、高沙弥住庵。一日歸來值雨。葉山云、甚處來。彌云、窯裏來。山云、可殺溼。  
雲嵒云、皮也無、打什麼皺。道吾云、皺也無、打什麼皮。山云、一場好曲調。

偶爾垂言借問伊  
胡笳不犯官商曲  
知音爭肯落今時  
玉笛同將劫外吹

(7) 拳、道吾智禪師到五峯。峯問、還識藥山麼。吾云、不識。峯云、為什麼不識。吾云、不識不識。

\* 白雲深處路難通  
擬問蹤由已涉功

掛角蠻羊無影跡 從容還落正偏中

(8) 拳、洞山到北巖哲禪師處。富問、甚處來。山云、湖南來。富云、觀察使、姓什麼。山云、不得姓。富\*

云、名什麼。山云、不得名。嵒云、還理事也無。山云、自有廊幕在。巖云、還出入否。山云、不出入  
巖云、豈不出入。<sup>\*</sup>山拂袖出去。巖、來日侵早入堂、召洞山。山近前。<sup>\*</sup>嵒云、昨日祗對上座話、不稱老  
僧意、一夜不安、今請上座、別下一転語。若愜老僧意、便開粥相伴過夏。山云、却請和尚問。巖云、  
不出入事如何。山云、太尊貴生。巖乃開粥、同過夏。

燭香人靜杳無聲  
苔滿丹墀皓月明

入戶當堂慵正坐  
出門猶懶下階行

(9) 拳、僧問雲嵒晟禪師、二十年在百丈巾缢、為什麼心燈不繞。嵒云、頭上寶花冠。僧云、頭上寶花冠意

旨如何。嵒云、大唐天子及冥王。後僧問九峯虔禪師、大唐天子及冥王意旨如何。峯云、却憶洞上之言。

玉鞭高舉擊金門  
引出珊瑚伍莫論

迥古輪王全意氣  
不彰寶印自然貴

\* 富 嶽 虚駒、以下同  
ジ

(10) 挙、雲嵒道吾、自南泉回藥山、嵒問藥山、如何是異類中行。山云、吾今日困倦、且待別時來。<sup>\*</sup> 嵒云、<sup>\*</sup> 嵒—嚴(駒)、以下同  
某甲特為此事來。山云、且云。嚴便出。道吾在方丈外、聞雲嵒不薦、不覺咬得指頭血出。吾却下來問  
嚴兄云、問和尚、那因緣作麼生。<sup>\*</sup> 嵒云、不為某甲說。吾便低頭。

饑喰嫩草遙山去

渴飲寒泉曲澗廻

放蕩不耕空劫地

暮天何用牧歌催

(11) 挈、僧問夾山會禪師、如何是夾山境。山云、猿抱子歸青嶂後、鳥啣花落碧嵒前。

蚌含明月珠生腹

龍擁深雲雨洒空

莫向平田翻巨浪

直須點点盡潮東

(12) 挈、僧問夾山、會處即不問、不會處、請師一言。山云、戶掛凋林、影中辨取。

威音那畔不能行

撒手還家懶問程

寢殿無人空寂寂

滿軒唯有月虛明

(13) 挈、夾山上堂云、明不越戶、穴不棲巢、目不顧他位、脚不踏他位裏。六戶不掩、四衢無蹤、學不停午、  
意不立亥。千劫眼不借舌頭底、萬劫舌頭不顧眼中明、峻機不扳鋒鉸事。到這裏、有箇什麼事。闔梨、  
竿頭絲線從君弄、不犯清波意自殊。

月沈碧海龍非隱

霧鎖蒼梧鳳不知

劫外森森無影木

垂陰自有未萌枝

(14) 挈、僧問夾山、撥塵見仏時如何。山云、直須揮劍。若不揮劍、漁父棲巢。後僧問石霜、撥塵見仏時如  
何。霜云、渠無國土、何處逢渠。僧後挾似夾山。山乃上堂、挾了云、門庭施設、不如老僧。入理深談、  
猶較石霜百步。

當機一句玉珊瑚

內外玲瓏溢日寒

無漏國中曾不住

月華影裏見心難

(15) 挈、石霜諸禪師、初參道吾、如何是觸目菩提。吾乃喚沙弥。弥應喏。吾云、添淨餅水着。良久、吾却

\* 嵒—嚴(駒)  
ジ  
\* 日—ナシ(駒)  
シ

問霜、汝適來問什麼。霜擬挾、吾便歸方丈。霜乃有省。

尋常語裏布槍旗

重詢擬進帰方丈  
一句分明更不疑

(16) 拳、漸源興禪師、一日持鋏、上石霜法堂、東顧西顧。<sup>\*</sup> 霜見乃云、作什<sup>\*</sup>

洪波浩渺、白浪滔天、覓什麼先師靈骨。源云、正好著力。霜云、一物也無、著什麼力。源持鍤上肩便

行。太原孚云、先師靈骨猶存。

本地虛明無一物  
幾人認得黃金骨

持鍬肩上便行時 大辯從來還若訥

(17) 拳、洞山价禪師解夏上堂云、初秋夏末、兄弟或東或西、直須向萬里無寸草處去。良久云、祗如萬里無一毫、一毫、一丈六尺也。更向三古、三古、三世也。重<sup>\*</sup>古、重古、二三古也。方<sup>\*</sup>一<sup>\*</sup>言。古音云、出明真<sup>\*</sup>卷五。今<sup>\*</sup>

寸草處、又作麼生去。顧視左右云、欲明安云、直得不出門、亦是草蔓蔓也。<sup>\*</sup>

安云：直得不出門，亦是草蔓蔓地。

帰家豈坐碧雲床  
南北東西本自由  
出戶不行青草地  
渠無向背那迴避

南北東西不自由。渠無向背那廻避。  
洞山問僧、世間什麼物最苦。僧云

江山問何  
廿間作廢物最苦  
作云

須信新豐親切語  
袈裟之下莫顛頽

(19) 拳、僧問洞山和尚、尋常令學人行鳥道。如何是鳥道。山云、不逢一人。僧云、如何行。山云、直須足

下無私去。僧云、祇<sup>\*</sup>如鳥道、莫便是本来面目、山云、闍梨<sup>\*</sup>為什麼却顛倒。僧云、甚麼處是学人顛倒處

山云、若不顛倒、為甚麼却認奴作郎。僧云、如何是本来面目。山云、不行鳥道。

古路翛然倚太虛  
行玄猶是涉崎嶇

不登鳥道雖為妙  
点檢将来已触途

(29) 拳、神山密禪師、与洞山過独木橋、洞山先過了、拈起木橋云、過來。神山云、价闍梨。<sup>\*</sup>洞山乃放下木

\* 梨 — 黎 虚駒

\* 什一甚虛駒

橋。

平地無端鑿陷坑\*

木橋拈起使人行

沈沈寒水如何渡

月夜金雞報五更

(21) 拳、僧問洛浦安禪師、衆手淘金、誰是得者。浦云、拳中旧宝不假披沙。僧云、恁麼則展手不逢也。浦

云、莫將鶴唳擬當啼鶯。

\* 不——豈虚駒

\* 鶯——鶯虛駒

淘金豈假披沙得

不触波瀾猶費力

露柱三更忽放光

此時未審何人識

(22) 拳、僧問洛浦、如何是祖師西來意。浦云、青嵐覆處、出岫藏峯。白月輝時、碧潭無影。

群花未發梅先坼 萬木凋零栢転奇

雲淡不彰篩月影 煙輕那露引風枝

(23) 拳、僧問洛浦、供養百千諸仏、不如供養一無心道人、百千諸仏有何過。無心道人有何德。浦云、一片白雲橫谷口、幾多歸鳥盡迷巢。

拾得疎慵非覓曉 寒山懶墮不知歸

声前一句円音美 物外三山片月輝

(24) 拳、蛤溪道者相看。洛浦問云、自從梨溪相別、今得幾年。溪云、和尚猶記得昔時事。浦云、見說、道者忘却年月也。溪云、和尚住持事繁、且容子細看。浦云、打即打会禪漢。溪云、也不消得。浦云、道者住山事繁。

\* 洛——ナシ虛駒

\* 看——ナシ虛駒

\* 即——則虛駒

這般消息不尋常 蟾桂枝枝布遠香

昨夜姮娥呈巧妙 眼睛直上繡鴛鴦

(25) 拳、僧問洛浦、一毫吞尽巨海、於中更復何言。浦云、家有白沵之図、必無垢是妖恠。

\* 嵩前雖有雲千頃 戶內殊無半夜燈

極目危巒今古秀 暮天斜照碧層層

\* 嵩——巖虛駒

\* 繡——綉虛駒

(26) 挈、僧問洛浦、如何是仏法大意。浦云、雪覆孤峯不白、兩滴石筍筍須生。

海底龍吟雲雨潤 林中虎笑谷風清

莫言滿路生荆棘 況是貧家少送迎

\*笑——嘯(虚駒)

(27) 挈、僧問洛浦、學人擬帰郷時如何。浦云、家破人亡、子帰何処。僧云、恁麼則不帰去也。浦云、庭前

殘雪日輪消、室內紅塵遣誰掃。

\*貧家——家貧(虚駒)

太平鄉國路空賒 帰興悠悠思莫涯

撒手到家何所有 琉璃寶殿鑽蟾華

\*莫——無(虚駒)  
\*鑽——鎖(虚駒)

(28) 挈、僧問洛浦、祖意教意、是同是別。浦云、日月並輪輝、誰言別有路。僧云、恁麼則顯晦殊途、是非

一撥。浦云、但自不亡羊、何須泣岐路。

月篩松影高低樹 日照池心上下天

赫赫炎空非卓午 团团秋夜不知円

(29) 挈、僧見韶山浦禪師、礼拝了、又手而立。山云、大材藏拙戸。僧又過一邊。山云、喪却棟梁材。

叉手須知己隔津 更重進步転漂淪

頑銅若作党金貨 祇可謾他無眼人

(30) 挈、僧問韶山、如何是和尚家風。山云、絕頂無根草、無風葉自搖。

妙峯孤須偏肥膩 天產靈苗不触地

翠葉無風常自搖 清香那逐春光媚

(31) 挈、黃山輪禪師、來參夾山。山問什麼處來。輪云、閩中來。山云、還識老僧麼。輪云、和尚還識學人麼。山云、不然、子且還老僧草鞋錢了、然後老僧還汝廬陵米價。輪云、恁麼則不識和尚。未審、廬陵米作麼價。山云、真獅子兒、善能哮吼。

父子相逢眼倍明 靈苗叢裏偶然行

箇中若謂金毛子 已是塩梅触大羨

\*什——云甚(虚駒)  
\*了——ナシ(虚駒)  
\*獅——師(虚駒)  
\*叢——叢(虚駒)  
\*但——坦(虚駒)  
\*謂——為(虚駒)

(32) 挈、僧問上藍超禪師、如何是上藍本分事。藍云、不從千聖借、豈向萬機求。僧云、不借不求時如何。

藍云、不可拈放、闍梨手裏得麼。

一片靈明本妙円

箇中非正亦非偏

寶峯瑞草無根帶

不待春功色自鮮

(33) 挈、僧問四禪禪師、古人有請不背。今請和尚、入井還去也無。禪云、深深無別源、飲者消諸渴。

曹溪源派古之今

意識徒將度浅深

好事昔人游戲處

雖然八井不曾沈

(34) 挈、海湖禪師、有座主問、和尚甚麼年行道。湖云、座主近前來。主近前。湖云、且道、橋陳如甚年行道。座主忙然無對。湖云、尿床鬼子。

多是從人學得來

一生空把口胡開

欲窮此片虛明地

七仏前前惣不該

(35) 挈、有一院、名無垢淨光禪院、化浴室。有人問、既是無垢淨光、為甚麼却造浴室。僧無語。後天蓋代云、三秋明月夜、不是騁団円。

雖然答盡深深意

爭奈投機句未親

欲會本來無垢的

更須入水見長人

(36) 挈、僧問九峯虔禪師、承聞和尚有言、諸聖間出、祇是伝語人是否。峯云、是。僧云、世尊一手指天、一手指地。天上天下唯我獨尊。和尚、為什麼却喚作伝語人。峯云、祇為一手指天、一手指地。所以、喚作伝語人。

妙相圓明不可親

奴兒婢子自懃懃\*

指天指地稱尊貴

也是伝言送語人

(37) 挈、僧問九峰、祖祖相伝、當伝何事。峰云、枳迦哩、迦葉富。僧云、如何是枳迦哩。峰云、無物与人。僧云、如何是迦葉富。峰云、國內孟常君。僧云、畢竟伝底事作麼生。峯云、百歲老兒分夜燈。

\* 常—嘗<sub>(虚駒)</sub>

\* 度—渡<sub>(駒)</sub>  
\* 事—是<sub>(虚駒)</sub>

\* 忙—茫<sub>(虚駒)</sub>  
\* 床—牀<sub>(虚駒)</sub>

\* 惣—總<sub>(虚駒)</sub>

\* 挈+「僧問天蓋幽禪  
師」<sub>(虚駒)</sub>

\* 化十造<sub>(虚駒)</sub>

\* 後—ナシ<sub>(虚駒)</sub>

\* 祇—只<sub>(虚駒)</sub>

\* ジ<sub>(虚駒)</sub>

\* 什—甚<sub>(虚駒)</sub>

\* 懃—勤<sub>(駒)</sub>

寂光影裏現全身 貴異天然迥出倫

家富兒奴偏得力 夜分燈火照西鄰\*

(38) 挈、九峯在石霜作侍者。石霜遷化<sup>\*</sup>、衆欲請堂中第一座、接続住持。峯不肯乃云、待某甲問過、若会先師意、某甲如先師侍奉。遂問首座云、先師道、休去、歇去、一念萬年去、寒灰枯木去、古廟裏香爐去、一条白練去。且道、明什麼边事。座云、明一色边事。峯云、恁麼則未会先師意在。座云、你肯我、那裝香來。座乃焚香云、我若不会先師意、香煙起處、脫去不得。言訖便坐脫。峯乃撫其背云、坐脫立亡則不無、先師意未会在。

戴角披毛異類身 寒灰枯木眼中塵

雖然未會先師意 爭奈臨行一句新

(39) 挈、僧問大光誨禪師、達磨還是祖否。光云、不是祖。僧云、既不是祖、又來作什麼。光云、為汝不薦。

僧云、薦後如何。光云、方知不是祖。

少林繞<sup>\*</sup>談事堪奇 腸夜梅開雪後枝

黃蘖昔年曾有語 大唐國裏沒禪師

(40) 挈、強德二上座、曾參九峯。於路次、見湧泉忻禪師騎牛不識。強云、蹄角甚分明、爭奈騎者不鑑。泉

拍牛避路。二上座、至樹下憩息。煎茶次、泉亦至乃問、二上座、近離甚處。強云、那邊。泉云、那邊

事作麼生。強提起茶盞子。泉云、此猶是這邊事、那邊事作麼生。強無語。泉云、莫道、騎者不鑑。

芳草漫漫豈麥秋 牧童白牯恣優游

異中有路人難見 却謂騎牛不識牛

(41) 挈、僧問文殊禪師、僧繇為什麼、邈志公真不得。殊云、非但僧繇、志公亦邈不得。僧云、志公為什麼邈不得。殊云、彩繪不将来。僧云、和尚還邈得也無。殊云、我亦邈不得。僧云、和尚為什麼邈不得。殊云、渠不苟我顏色、教我如何邈。

身光熾盛相巍巍 妙手如何彩繪伊

\*鄰——隣<sup>(虚駒)</sup>

\*化十後<sup>(虛駒)</sup>

\*某甲——ナシ<sup>(虚駒)</sup>

\*裏——ナシ<sup>(虚駒)</sup>

\*什——甚<sup>(虚駒)</sup>

\*座——ナシ<sup>(虚駒)</sup>

\*若——ナシ<sup>(虚駒)</sup>

\*煙——烟<sup>(虚駒)</sup>

\*得十者<sup>(虚駒)</sup>

\*什——甚<sup>(虚駒)</sup>

\*談——焰<sup>(虚駒)</sup>

\*脢——臘<sup>(虚駒)</sup>

\*梅——方<sup>(虚駒)</sup>

\*甚十麼<sup>(虚駒)</sup>

\*子——ナシ<sup>(虚駒)</sup>

\*漫漫——漫漫<sup>(虚駒)</sup>

\*什——甚<sup>(虚駒)</sup>、以下同  
ジ

休問僧繇吳道子  
志公他自不能知\*

\*自一日虛駒

(42) 拳、鳳翔府石柱禪師、游方日到洞山。即青林也。 垂語云、有四種人、一人說過仏祖、一步行不得。一人行

\* 「即青林也垂語云」——「時

過仏祖、一句說不得。一人說得行得。一人說不得行不得。那箇是其人。柱出衆對云、一人說過仏祖、

處和尚語

\*一歩行不得者、祗是無舌不許行、一人行過仏祖。一句說不得者、祗是無足不許說。一人說得行得者、祗是函蓋相称。一人說不得、行不得者、斷命求活、如石女兒披枷帶鎖。洞山云、闍梨分上、又作麼生。

\* \* 枕一只虚駒以下同ジ  
「是……者」ノ十三

柱云、該通分上卓卓寧彰。洞山云、祇如海上明公秀、又作麼生。柱云、幻人相逢、撫掌呵呵。

\* \* 鐸鎖虛駒

水底泥牛耕白月 雲中木馬驟清風

(43) 拳、僧問曹山寂禪師、五位對賓時如何。山云、汝今問那箇位。僧云、某甲從偏位中來、請師正位中接

山云、不接。僧云、為什麼不接。山云、恐落偏位中去。山復問僧、祇如不接、是對賓、不是對賓。僧云、早是對賓了也。山云、如是如是。

\* 什一甚虛同上

月中玉兔夜懷胎  
日裏金烏朝抱卵

転身打破琉璃椀

\* 琉——瑠虛駒

(44) 拳、曹山辭洞山、洞山問、子向什麼處去。山云、不變異處去。洞山云、不變異處、豈有去耶。曹山云、去亦不變異。

\* \* \* 洞一ナシ虚

家家門掩蟾蜍月  
若謂縱橫無變異  
猶如擲劍擬揮空

\* 鳥  
——鶯  
○虛  
○駒

(45) 拳、僧問曹山、世間什麼物最貴。山云、死貓兒頭最貴。<sup>\*</sup> 僧云、為什麼死貓兒頭最貴。山云、無人著價。<sup>\*</sup>

\* 什一甚虛駒、以下同

腥臊紅爛不堪親  
觸動輕輕血污身  
為伊非是世間珍  
何事杳無人著價

\* 最貴一ナシ 虚駒

46 拳、靈泉問蹤山仁禪師、枯木生花、始與他合。是這邊句、是那邊句。山云、亦是這邊句。泉云、如何是那邊句。山云、石牛吐出三春霧、靈雀不棲無影林。

滄海無風波浪平 煙收水色虛含月\*

寒光一帶望何窮 誰辨箇中龍退骨

\* 煙——烟(虚駒)  
\* 含月——涵碧(虚駒)  
ヲ、(駒)ハコノ下ニ  
「含月」トアリ

(47) 拳、僧与踈山造壽塔畢、來白踈山。山云、汝將多少錢與匠人。僧云、一切在和尚。山云、為將三文錢與匠人、為將兩文錢與匠人、為將一文錢與匠人。若道得、與吾親造塔。僧無語。後拳以大嶺。嶺云、還有人道得麼。僧云、未有人道得。嶺云、汝回拳似踈山道、大嶺聞拳有語。云、若將三文錢與匠人、和尚今生決定不得壽塔。若將兩文錢與匠人、和尚與匠人共出一隻手。若將一文錢與匠人、累他匠人、眉鬚墮落。其僧回、拳似踈山。山具威儀、望大嶺禮拜嘆云、將謂無人、大嶺古仏放光、射至此間。雖然如是、也是臘月蓮華。大嶺、後聞此語云、我恁麼道、也是龜毛長三尺。

清風吹動釣魚船 鼓起澄江浪拍天

堪笑錦鱗爭戲水 到頭俱被曲鈎牽

(48) 拳、雲居膺禪師上堂云、得者不輕微、明者不賤用、識者不咨嗟、解者無厭惡。從天降下則貧寒、從地湧出則富貴。門裏出身易、身裏出門難。動則埋身千丈、不動則當処生苗。一言迥脫、獨拔當時、言語不要多、多則無用處。

門頭戶尾事千差 了盡猶來未到家

明月堂前無影木 嚴凝雪夜忽開花

(49) 拳、僧問青林虔禪師、學人往商時如何。林云、死蛇當大路、勸子莫當頭。僧云、當頭者如何。林云、喪子命根。僧云、不当頭者如何。林云、亦無廻避處。僧云、正当恁麼時如何。林云、失却也。僧云、未審、向什麼處去。林云、草深無覓處。僧云、和尚也須隄防始得。林撫掌云、一等是箇毒氣。

長江澄澈印蟾華 滿目清光未是家

借問漁舟何處去 夜深依舊宿蘆花

(50) 拳、僧問龍牙遁禪師、二鼠侵藤時如何。牙云、須有隱身處始得。僧云、如何是隱身藏。牙云、還見儂家麼。

\* 忽——正(虛駒)

\* 拍——接(虛駒)

\* 船——舡(虛駒)

\* 魚——漁(虛駒)

\* 華——花(虛駒)

\* 腹——臍(虛駒)

\* 腹——臍(虛駒)

\* 腹——臍(虛駒)

\* 「將謂無人」ノ四字  
ナシ(虚駒)  
ナシ(虚駒)  
ナシ(虚駒)  
ナシ(虚駒)

「含月」トアリ

寒月依依上遠峯 平湖萬頃練光封

漁歌驚起汀洲鷺 飛出蘆花不見蹤

51) 拳、白水仁禪師上堂云、老僧尋常不欲向声前句後、敲弄人家男女。何故声且不是声、色且不是色。時

有僧問、如何是声不是声。水云、喚作色得麼。僧云、如何是色不是色。水云、喚作声得麼。水復云、

且道、對闍梨話、為闍梨說。若向這裏會得、評你有箇入路。

色自色兮声自声 新鶯啼處柳煙輕

門門有路通京國 三島標斜海月明

52) 拳、僧問洛京白馬儒禪師。如何是法身向上事。儒云、井底蝦蟇吞却月。

九重深密視聽難 玉殿瓊樓宿霧攢

變理盡帰臣相事 輸王不載寶花冠

53) 拳、九峯虔禪師示衆云、拳一不得拳二、放過一著、落在第二。雲門出衆云、昨日有人、從天台來、却

往徑山去。峯云、來日不得普請。便下座。

聲前一句口如眉 仏祖從來惣不知

昨夜崑崙閑說夢 白頭生得黑頭児

54) 拳、僧問天童啓禪師。如何是應用無虧底眼。童云、恰如瞎一般。

旨聲音啞迥天真 眼似眉毛道始隣

昨夜東君潛布令 黃鸝啼處緣楊春

55) 拳、僧問洞山詮禪師、清淨行者、不上天堂、破戒比丘、不入地獄時如何。山云、度盡無遺影、還他越

涅槃。

相好巍巍大丈夫 一生無智恰如愚

從來仏祖猶難望 地獄天堂豈可拘

56) 拳、僧問北院靜禪師、牛頭未見四祖時如何。院云、異境靈枝、覩者皆羨。僧云、見後如何。院云、葉

\* 枝——「松」  
\* 本——「虛」

\*尋常——ナシ  
\* 虛——クモ

\* 梨——黎  
\* 虛——クモ

\* 箕——ジ  
\* 働——クモ

\* 煙——烟  
\* 虛——クモ

\* 閻——鶯  
\* 虛——クモ

落已枝催、風來不得韻。

宝杖親携掛翠纓 衍徊常遶玉階行

転身就父無標的 拈却花冠不得名

(57) 挈、僧問青峯楚禪師、大事已成為什麼亦如喪考妣。峯云、不得春風花不開及至花開又吹落。

家山歸到莫因循 竭力寅昏奉二親

機盡功忘恩義斷 便成不孝闡提人

(58) 挈、木平道禪師問洛浦、一漚未發時、如何辨其水脈。浦云、移舟諳水勢、挾棹別波瀾。平不契。乃參

蟠龍、還問前語。龍云、移舟不辯水、挾棹即迷源。

金烏玉兔兩交輝 照破威音未兆時

若謂青霄別有路 木人依舊皺双眉

(59) 挈、僧問潼泉禪師、如何是相伝底事。泉云、龍吐長生水、魚吞無尽漚。僧云、請師挑剔。泉云、搘鼓

転船頭、棹穿波底月。

依依半月沈寒水 耿耿三星碧落攢

昔日雲嵒曾漏泄 金輪王子寶花冠

(60) 挈、僧問百嵒禪師、如何是禪。嵒云、古塚不為家。

故國清平久有年 白頭猶自恋生緣

牧童却解亡功業 懶放牛兒不把鞭

(61) 挈、僧問百嵒、如何是道。嵒云、從勞車馬跡

曹溪古路綠苔生 車馬登臨已涉程

野老疲羸兼跛挈 手携玉杖夜深行

(62) 挈、僧問百嵒、如何是教。巖云、貝葉收不尽。

四十九年成露布 五千餘軸尽言詮

\* 挂—挂(虚駒)

\* 成—明(虛駒)  
\* 什—甚(虛駒)

\* 語—話(虛駒)  
\* 辨—辨(虛駒)

\* 皺—皺(虛駒)

\* 船—舡(虛駒)

\* 嵩—巖(虛駒)

\* 嵩—巖(虛駒)、以下同  
ジ

\* 亡—忘(虛駒)

\* 嵩—「巖和尚」(虛駒)  
\* 嵩—巖(虛駒)

\* 嵩—巖(虛駒)

妙明一句威音外

折角泥牛雪裏眠

\* 裏——裡(駒)

63 挈、僧問泐潭明禪師、碓搗磨磨、不得忘却時如何。潭云、虎口裏活雀兒。

\* 搗——搗(駒)

一念蕭蕭不記年  
萬里無雲孤月円

64 挈、僧問同安察禪師、如何是天人師。安云、頭上角不全、身上毛不出。

秘殿重樟曉尚寒  
丹墀苔潤未排班

宝香鳳燭煙雲合  
寂寂簾垂不露顏

65 挈、僧問谷山緣禪師、如何是祖師西來意。山云、半夜烏兒頭戴雪、天明亞子抱頭歸。  
瑞霧祥煙鑠玉樓

妙年王子恣優游  
琉璃殿上騎金馬

明月堂前輶繡毬

66 挈、僧問白雲藏禪師、如何是深深處。雲云、矮子渡深溪。

白頭童子智尤長  
半夜三更渡渺茫

任運往來無間斷  
不消艤艇與浮囊

67 挈、僧問新羅大嶺禪師、如何是一切處清淨。嶺云、截瓊枝寸寸是寶、析梅檀片片皆香。

\* 析——折(駒)  
\* 國——骨(駒)

乾坤盡是黃金國  
萬有全彰淨妙身

玉女背風無巧拙  
靈苗花秀不知春

68 挈、僧問同安丕禪師、如何是和尚家風。安云、金鷄抱子帰霄漢、玉兔懷胎入紫微。僧云、忽遇客來、

\* 喰——喰(駒)、御(駒)  
\* 煙——烟(駒)

如何祗待。安云、金果早朝猿摘去、玉花晚後鳳啣來。

日午煙凝山突兀  
夜央天淡月嬋娟

混然寂照寒霄永  
明暗円融未兆前

69 挈、僧問同安、依經解義、三世仇怨離絳一字、即同魔說。此理如何。安云、孤峯迥秀不掛煙蘿、片月橫空、白雪自異。

\* 怨——冤(駒)  
\* 掛煙——挂烟(駒)

雲自高飛水自流　海天空闊漾虛丹  
夜深不向蘆灣宿　迥出中間与兩頭

(70) 拳、僧問新羅雲住禪師、如何是諸仏師。住云、文殊聳耳。

無相光中未兆身　清虛渺邈豈<sup>\*</sup>為隣  
一輪明月當軒照　玉殿蕭蕭不見人

\* 豈——月(虚駒)

(71) 拳、僧問雲居簡禪師、孤峯獨宿時如何。居云、九間僧堂裏不臥、誰教你孤峯獨宿。

法爾非脩<sup>\*</sup>本十成<sup>\*</sup>　平常酬答最分明

端照指出長安道　無奈遊人不肯行

(72) 拳、僧問護國澄禪師、如何是本来心。国云、犀因翫月紋生角、象被雷驚花入牙。

三脚靈龜荒徑走　一枝瑞草亂峯垂

\* 径——逕(虚駒)  
\* 嶺——岡(虚駒)

崑崙含玉山先潤　涼兔懷胎月未知

(73) 拳、僧問護國如何是本来父母。国云、頭不白者。僧云、將何奉獻。国云、懃懃無米飯、堂前不問親。

出門遍界無知己　入戶盈眸不見親

虛室夜寒何所有　碧天明月頗為隣

\* 問——ナシ(虚駒)

(74) 拳、僧問荷玉慧禪師、如何是西來的的意。玉云、不禮拜、更待何時。

虛堂寂寂夜深寒　撫得瑤琴月下彈

不是知音從側耳　悲風流水豈相干

(75) 拳、僧問阿育通禪師、如何是和尚家風。育云、渾身不直五文辰。僧云、恁麼則太貧寒生。育云、祖代如此。僧云、如何施設。育云、隨家豐儉。

祖代家風沒一文　清貧終是更清貧

著衣喫飯隨豐儉　物物頭頭用最親

(76) 拳、僧問金峯志禪師、四海晏清時如何。峯云、猶是階下漢。

\* 著——着(虚駒)

四海煙塵已晏然

當軒皓月照人寒

大功不賜將軍賞

寶馬金槍頓懶觀

(7) 拳、僧問蜀州西禪禪師、如何是非思量處。禪云、誰見虛空夜點頭。

一點靈明六不收 昭然何用更凝眸

箇中消息人難委 独有虛空夜點頭\*

(78) 拳、僧侍立自眉霞禪師次、眉云、可憲熱。僧云、是。眉云、祇如熱向什麼處廻避。僧云、鑊湯爐炭裏廻避。眉云、鑊湯爐炭裏又作麼生廻避。僧云、衆苦不能到。

崑崙片玉火中潤 碧落孤蟾水底円

一念翛然無異色 任從滄海變桑田

(79) 拳、僧問廣德延禪師、如何是透法身句。德云、無力登山水、茆戶絕知音。

體妙探玄盡涉程 爭如野老異中行

功忘日用平懷穩 兔事君王暗辱驚

(80) 拳、僧問石門蘊禪師、如何是和尚家風。門云、物外獨騎千里象、萬年松下擊金鐘。

夜明簾外月朦朧 騎象翻身擊寶鐘

洪韻上騰三界外 聲天何事睡猶濃

(81) 拳、僧問淨衆禪師、蓮華未出水時如何。衆云、菡萏滿池流。僧云、出水後如何。衆云、葉落不知秋。

白藕未萌非隱的 紅花出水不当陽

遊人莫用伝消息 自有清風透遠香

(82) 拳、僧問同安志禪師、二機不到處、如何舉唱。安云、偏處不逢、玄中不失。

這邊那畔惣難逢 一句無私不處中

紅日暮沈西嶂外 空留孤影照溪東

(83) 拳、僧問廣德義禪師、古人云、言語道斷非去來今。此理如何。德云、彌勒涅盤知幾劫、護明猶未降迦 \* 盤—槃(虚駒)、以下同

\* 煙—烟(虚駒)  
\* 皓—明(虚駒)

\* 夜—暗(虚駒)

\* 自—白(虚駒)  
\* 什—甚(虚駒)

\* 物—総(虚駒)  
\* 水—ナシ(虚駒)



虛空為鼓須弥槌

擊者雖多聽者稀

半夜觸體驚破夢

滿頭明月不思歸

91 拳、大陽明安禪師上堂云、嵯峨萬仞、鳥道難通。劍刃輕冰、誰當履踐。宗乘妙句、語路難陳、不二法門、淨名杜口。所以、達磨西來、九年面壁始遇知音。大陽今日也太無端。珍重。

不掛唇皮一句奇 少林冷坐最慈悲

須知此道非伝授 立雪神光已強為

92 拳、僧問大陽、如何是和尚家風。陽云、滿餅傾不出、大地沒飢人。

荆山美玉何須辨 赤水玄珠不用拈

罔象無心黃帝重 卍和有智楚王嫌

93 拳、僧問投子青禪師、師唱誰家曲、宗風嗣阿誰。子云、威音前一箭、射透兩重闕。僧云、如何是相付

底事。子云、全因淮地月、得照郢陽春。僧云、恁麼則入水見長人。子云、祇知荆玉異、那辯楚王心。  
子隨後、以拂子敲禪床一下。

珊瑚枝上玉花開 風遙清香遍九垓

勿謂乾坤成委曲 韶陽曾見睦州來

94 拳、投子示衆云、若論比事、如鸞鳳衝霄不留其跡、羶羊掛角、那覓其蹤。金龍不守於寒潭、玉兔豈棲於蟾影。其或賓主若立、須威音路外搖頭。  
問答言陳、乃玄路傍提為唱。若能如是猶在半途、更乃凝眸、不勞相見。

水澄月滿道人愁 妙盡無依類莫收

劫外正偏兼到路 不崩枝上辨春秋

95 拳、僧問投子和尚、適來拈香祝聖壽。且道、當今皇帝、壽年多少。子云、月籠丹桂遠、星拱北辰高。

六國清平賀聖年 珠簾高捲月明前

金輪那肯當堂坐 不用丹墀擊靜鞭

\* 明月—白髮駒

\* 掛—挂(虚駒)

\* 曾—親(虛駒)

\* 衝—冲(虛駒)  
\* 羶—羚(虛駒)  
\* 挂—挂(虛駒)

\* 頭—ナシ(駒)

\* 到—帶(虛駒)  
\* 聖—ナシ(虛駒)

\* 捲—卷(虛駒)

96 挈、僧問東京天寧楷禪師、師唱誰家曲、宗風嗣阿誰。寧云、金鳳夜棲無影樹、峯巒纔露海雲遮。  
\* 禪師——和尚(虚駒)

等閑無問豈安排 一句全提隱顯該

薄霧依依籠古徑 孤峯終不露崔嵬

97 挈、僧問天寧、夜半正明、天曉不露。如何是不露底句。寧云、滿船空載月、漁父宿蘆花。

\* 船——缸(駒)  
\* 燃——然(虚駒)

星流水國夜燃燈 月印江天明似鏡

隱顯無私位不該 依俙擬動成偏正

98 挈、天寧上堂云、法身者理妙言玄、頓超終始之患。諸仁者、莫即幻身外、別有法身麼。莫即幻身便是

\* 即——是(虚駒)

法身麼。若也恁麼會去、尽是依他作解、蒙昧兩岐、法眼未得通明。不見、僧問夾山、如何是法身。山

\* 坎——坑(虛駒)

云、法身無相、如何是法眼。山云、法眼無瑕。所以道吾云、未有師在。忽有人問老僧、如何是法身。

\* 檢——檢(虛駒)

羊便乾処臥。如何是法眼。驢便濕処尿。更有人問、作麼生是法身、買帽相頭、作麼生是法眼、坎坎堆

\* 檢——檢(虛駒)

阜。若点檢將來、夾山祇是學處不明、如流俗閨閣裏物、不能捨得、致使情閑固閉、識鑽難開。老僧今

\* 須——除(虛駒)

日若不当陽顯示、後學難以知帰。勸汝諸人、不用求真、唯須息見。諸見若息、昏霧不生。自然智鑑洞

\* 得——却(虛駒)

明、更無他物。諸仁者還會麼。良久云、珠中有火、君須信、休向天邊問太陽。

\* 檢——檢(虛駒)

道合平常絕異端 行人何必歷艱難

從今莫買孫賓卜 龜殼無靈不用鑽

99 挈、大洪保壽恩禪師上堂、拈拄杖云、□□□□絕比倫、從來無葉又無根、有時扶過繼□水、幾度伴帰

\* 原本四字磨滅、(虛駒)  
\* 二八「得自天台」ト

明月村。雖然如是、也不得放過。擊禪床一下、便下座。

\* 一字磨滅、(虛駒)  
\* 二八「得自天台」ト

此杖不從天地得 登山涉水承渠力

\* 放——無(虛駒)  
\* 杖——樹(虛駒)

如今擲向乱峯前 免致叢林為軌則

\* 橋——ト(アリ)  
\* 二字磨滅、(虛駒)

(100) 挈、保壽上堂云、三界唯心、萬法唯識。檻外雲生、簷頭雨滴。澗水湛如染、野花開似織。此時若不究

根源、謾向當來問彌勒。還會麼。不勞久立。

\* 得——生(駒)、ナシ(虚)

靈然不涉去來今 三界都盧一点点心

\*

丹霞山淳禪師頌古序

嶺南之後派列岐、分曹洞一宗、門庭孤峻月鉤雲、餌不犯清波。意自殊玉線金針、宛轉虛玄鋒不露。正偏兼到妙盡忘功、明晦叶通力窮転位。綿綿乎克當其胄者、爰有丹霞淳禪師歟。

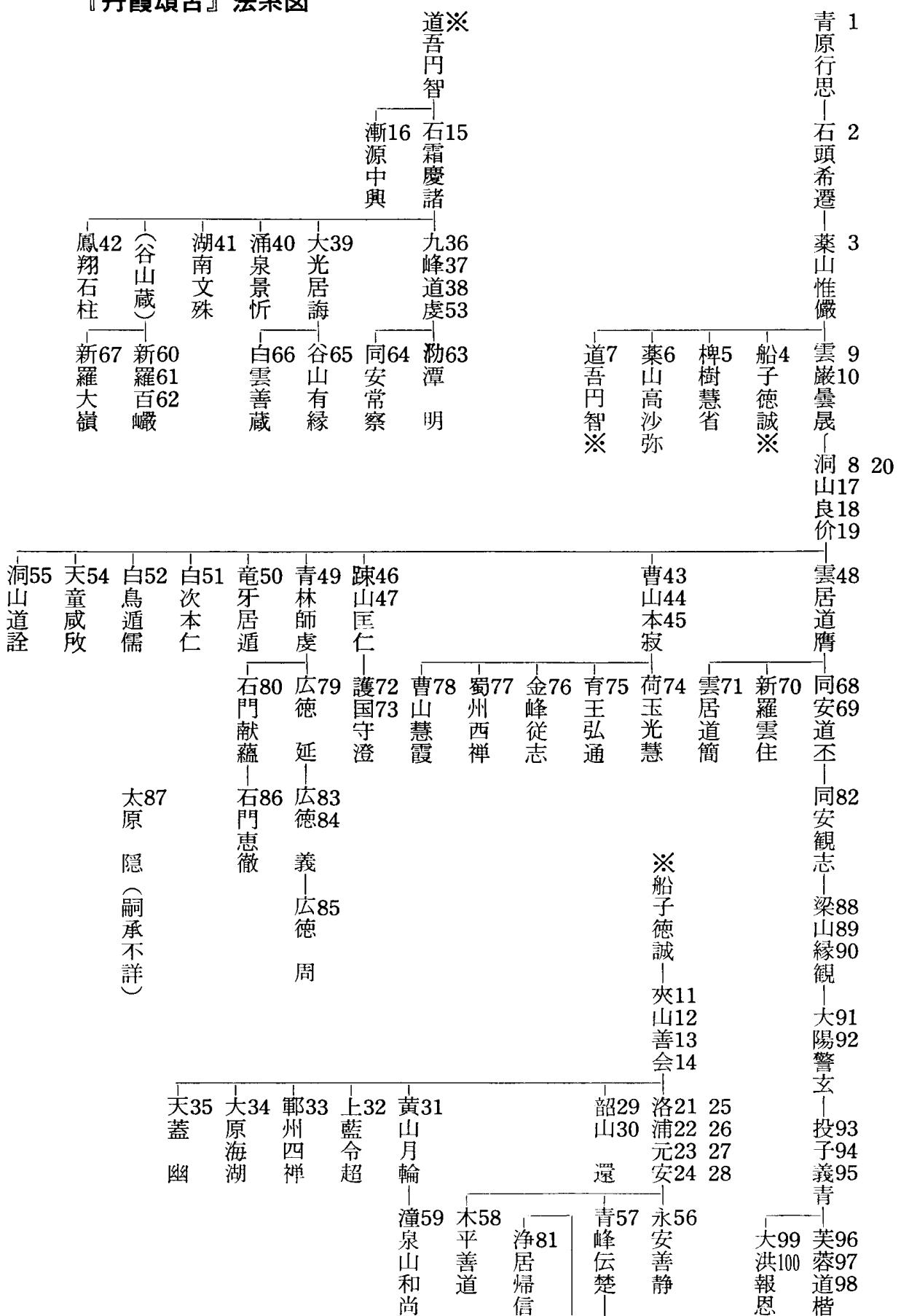
師、一日退居無住庵、慨宗風之欲墜、乃採摭從上機緣。首自清源下之保寿、總一百則、集而為頌、俾乎至道、垂裕後昆。其明宗也、潛通於未兆之前、其立旨也、密契於無功之後。烟籠古路、乘玉馬以踐苔、紋月鎮滄、溟駕泥牛而耕。練色全体、即用豈滯、虛凝全事、即真不彰。影迹琉璃殿上、臣退位御朝君、翡翠簾前子、転身而就父。借功明位、撤手廻途。幽岩枯木騰芳、古潤寒冰發鮮。密雲致雨、濟萬物以無心、杲日麗天、落百川而非照。無絃曲調、不屬宮商、自有知音、遙相證拋。

謹序

參學比丘僧 正覺 述

\*底本ハコノ一行無  
刻、虚駒ニハ「檻外  
桃花春蝶舞 門前楊  
柳曉鶯吟」トアリ  
シハコノ序文ナ

△附錄▽



(数字は本則の番号を示す)